霊獣を求めて

蘭流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊獣を求めて

【Ｎコード】
Ｎ２４７２Ｌ

【作者名】
蘭流

【あらすじ】
伝説の霊獣〈キリン〉を追うジャイク。その中で、仲間に出会い、さまざまな困難に立ち向かっていく。

序章＜出会い＞-１

１

全ての者を寒さでもてなす地＜雪山＞。そこに積もる雪は、一年中溶けることを知らず、流れる冷気は、訪れる者のスタミナを、あっという間に奪い取る。この寒さを防ぐには、ホットドリンクという、身体を暖める効果を持つ飲み物を飲むか、スキルという、防具に備え付けられた特殊な効果で打ち消すしかない。そんな場所に今、一人の少年が訪れていた。

彼の名はジャイク。全身を、不思議な幾何学模様が特徴的なマフモフ装備で包んでいる。このマフモフ装備は、寒さを完全に防いでくれる数少ない装備で、ポッケ村の住人などは普段着としても利用している。腰には、ボーンククリという初心者用の片手剣を装備している。一目見れば、新米ハンターという言葉が当てはまる。そんな格好だ。

しかしジャイクは、まだハンターではない。まだ、というのは、これからジャイクがすることが、彼がハンターとなれるかどうかを左右するからだ。

話は、二日前へとさかのぼる。

＊＊＊

「何度言えば気済むんだこのバカ息子！！」

「ああ何度でも言ってやる石頭のクソジジイ！！」

そこは大陸の北東、フラヒヤ山脈近くの高地にある村＜ポッケ村

>。巨大なマカライト鉱石が崇められているこの村で、一組の親子が喧嘩を繰り広げられていた。
父親は興奮で顔が赤くなっている。目も血走り、その形相はまるで怒ったティガレックスのようだ。
少年――――ジャイクは、そんな父親にひるむことなく叫ぶ。
「俺はハンターになりたいんだ！　どうして許してくれないんだよ！」

ジャイクは今年十六才になったばかり。ハンターとしてはいささか早すぎる年齢だ。彼の父が反対している理由もそこにある。
ジャイクだってそんなことは百も承知している。だが、ジャイクにはそれでは納得できない理由があった。
「親父だって、十六からハンターやってたんだろ！？　だったら俺だって……」

ジャイクの父はハンターだ。《ファイアロード》という二つ名を持ち、ギルドでも名を挙げている。
そんな父がハンターをはじめたのは十六の時だと知っていたジャイクは、ならば自分もと考えていたのだ。
「なんで“今”にこだわる！　もう少し力をつけてからでもいいじゃねぇか！」
「“今”じゃなきゃ意味がねぇんだよ！　俺は親父を超えたいんだ！！」

親父を超えるためには十六じゃないと意味が無い――。父親と同じスタートラインに立ちたいと暗に言ったジャイクに、父は一瞬言葉を失った。

そして、今まで守るべき対象と思っていた息子が、いま立派に一人の男として踏み出そうとしているのだと知り、考えを改めることにした。

「……分かった。ハンターになることを認めてやる」

ただし、と父は続ける。

「一人でドスギアノスを倒せ。それが条件だ」

＊＊＊

そして今、ジャイクは父からの条件であるドスギアノスを倒すために雪山へと来ていた。

エリア５の洞窟の中でジャイクは一旦立ち止まる。辺りを警戒し、モンスターがいないことを確認すると、アイテムポーチのなかを確かめる。

ここから先、エリア６からはドスギアノスの生息圏となる。

初めての狩り、しかも相手はドスギアノスだ。少しでも、不安材料は取り除いておきたかったのだ。

自分の心臓が、熱く鼓動するのを感じながらアイテムポーチの中身を確認し終えたジャイクは、エリア６へとその足を踏み出した。

2

「――いた。」

エリア６の中央付近、そこにドスギアノスはいた。その姿には間違いなくボスとしての威厳が漂っていて、周りには数頭のギアノス

が群れをなしている。
何ともいえない緊張感がジャイクを包んだ。幸い、ドスギアノスにこちらの存在は気付かれていないらしく、エリア８へと向かおうとしている。
ジャイクはペイントボールを用意すると、ドスギアノスに向けて思い切り投げつけた。

次の瞬間、ドスギアノスの目がジャイクを見た。

「っっ！！」

その視線にジャイクはのけぞる。それは間違いなく捕食者が獲物を見つけたときの目で、自分を捕食しようとする意思が強く感じられた。

（これが、モンスター……）

だが、怖気づいてはいられない。ハンターとなれば、もっと巨大で、強いモンスターと戦うことになる。ジャイクはこのドスギアノスという壁を、乗り越えなければいけないのだ。

「お前は、壁だ」

腰にさしてあったボーンククリを構える。

「俺はお前を乗り越えて、次へ行く」

そしてジャイクは、ドスギアノスめがけて切りかかった。

〈出会い〉-2

「はぁぁぁっ！！」

ジャイクは構えたボーンククリをドスギアノスに向けて振り落とした。が、その剣はドスギアノスに触れることなく空を斬る。

――避けられた！

ジャイクは心の中で悪態をつく。

だが焦ってはいられない。ジャイクはドスギアノスと距離をとり、相手に向き直る。

だが次の瞬間、ジャイクの目の前に大きな爪が迫っていた。

＊＊＊

「ジャイクにはまだ早すぎやしないかい？」

オババ様――村長が、そうジャイクの父に言って少し心配そうな顔をする。

ジャイクの父はその時、集会所でギルドマネージャーや村長と話をしていた。

その三人は昔からの飲み仲間で、その日その日の話題を肴（さかな）に酒を飲むのが習慣となっていた。そしてその日の話題に挙がったのが、ドスギアノス討伐に出かけたジャイクのことだった。

「確かにおまえが初めて狩りに行ったのは十六の時じゃったが、無理にそれに合わせることもなかったろうに……」

ハンターには基本的に年齢や性別による制限がない。そのため、誰でもハンターになることができるのだが、それでもやはりふさわしい年齢というものはある。
ジャイクの年齢は十六。本当ならばもう少し時間をかけて体を鍛えるなりしてから狩りに出るべきなのだろう。
ジャイクの父も心の中ではそう思っている。だが、それよりも大きな気持ちが彼の中にはあった。

「まあ、確かにその通りなんですがね、だけどあいつ言ったんですよ。俺を超えたいって」

だったら俺に止める理由は無いですよ。そう言って彼は、どこかうれしそうな表情をした。

「蛙の子は蛙ってやつよね～」

ギルドマネージャーはそう言って手に持った大きな盃を口へ運ぶ。

「なんじゃいそりゃ」
「東の島国のことわざよ～。親は子に似るって意味らしいの～」
“親は子に似る”。その言葉を聞いてジャイクの父は少し遠い目をする。
（ジャイクの奴は俺よりもあいつ似だな……）
――久しぶりに墓参りでも行くか。
そしてまた、盃のなかの酒をあおった。

＊＊＊

「うわっっ！」

いつの間にか目前に迫っていた爪をとっさに右手の盾で防ぐ。が、小さな盾では衝撃を防ぎきれず、後ろへと仰け反った。

（距離を詰められた！？　でも一体どうやって……）

どうやったかは分からないが、このままドスギアノスの間合いの中に居続けるわけにもいかない。

ジャイクは体勢を立て直してもう一度、今度は目を離さずに距離をとる。

ドスギアノスはというと、ジャイクをにらみ続けている。

そうジャイクが確認したのもつかの間、ドスギアノスはその身をかがめ、その爪をジャイクに突き立てようと大きく跳躍した。

（さっきのはこれか――！）

ジャイクはその攻撃を横方向に回避する。そしてドスギアノスの横に回り込み、ボーンククリで切り付ける。

「ギャァァア！」

「ッよし！」

ここならドスギアノスの攻撃は当たらない。そう判断したジャイクは、横からの攻撃をメインに戦うことにした。

それを、遠くから見つめる目があった。その目はまるで血のように深紅(あか)くすべてを見通すような目だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2472l/

霊獣を求めて

2010年10月21日21時42分発行